



## もっと人の集まる、 オモロイ学会に

情報・システムサイエティ会長 木戸出正継

学会活動も社会での情報活動変革に柔軟に対応したい。特に、現代の重要な技術戦略分野の一つである ICT 分野の専門知識集団である電子情報通信学会も、社会変化に対応し、その活動を世に情報発信し、存在感を示すべきである。ICT 分野の研究開発は、米国を先頭に西欧がその流れを導き、日本が一部先導しながらも追従している。そして、近隣のアジア諸国は後方から速いスピードで追従し、肩を並べられる日も遠くはない。このような環境の中、ICT 研究開発の成果をいち早く社会に発信し、胸を張って最先端集団で進んでいきたい。本学会を、新しい技術の小さな種でも大きく育てる、研究開発の歯車をプラスの方向に回転させていく研究者・技術者交流の場とし、自然にいろいろな人が集まってくる集団にしたい。そして、学会での活動内容を積極的に発信し、身近な信頼される集団としての存在をアピールしたいものである。

日常生活における ICT は、速いスピードで、そして新しいスタイルで進展している。例えば、米国シリコンバレーを中心に話題になっている、インターネットワールドでのデータ検索やそのインフラシステムの構築に関する情報通信処理技術の種は、本学会の専門領域で他の業界に先立って認知されるであろうか。それなりの品格と歴史を持った学会環境を、世の中の変化に柔軟にかつスピーディーに対応できるような集団にすべく、どのように変革したらいいのか検討し、新しい道を開いていきたい。理工学のみならず、社会学・医学・教育学・心理学などいろいろな観点からのアプローチが必要であり、多様で幅広い会員構成でオープンな学会環境にしましょう。その中で、子供たちに理工への興味を持たせ、学生・若い研究者には学会活動への参加を促し、そしてシニア(特に、フェローの方々)にも活動継続や再登場を勧め、交流の活発な場をビジュアルにし、情報発信をしたい。

学会での意見交流・情報発信が、現役ばかりの専門家から、経験豊かなシニアから、新鮮な若者から、異性の目から、そして一般の人からなど、いろいろな観点から活発に行われると、プラスの増幅が起り、ますます多視点の人々が集まり、専門知識も雪だるま式に大きくなり、社会に広まっていくと期待できる。具体的には、専門的な集まりである研究会においても、若い学生・研究者からの半熟の研究発表を、経験の深い先生・技術者がいろいろな問題点からの切り口を助言できれば、深く広く追求でき骨太の技術に成長し、夢のある技術に向かって、建設的な議論展開が可能である。従来は、一般に精通している人からの意見は彫刻型で、提案したアイデアの十分でないところばかりをそり落とし、残った部分だけでの小さなアイデア形成になりがちであったが、粘土型で不十分なところをいろいろな観点から継ぎ足し、知識増幅を進め、より大きなアイデア形成をしていく専門知識集団になるのが、学会のあるべき姿の一つであろう。個の知恵の発掘をやりやすく、集団としての知恵の増幅の仕組みを内蔵している場、他人の良い点を認め、自分の特徴を明確に主張し、仲間同士で知識を高め合うような専門家集団を実現したい。

このためには、会員自身も持つべき知識レベルの高さと広さを常に意識し、その上に新しい知識を築き上げ、そしてそれらを表現し相手に十分に伝えられることが必要である。類は類を呼ぶ、会員はいろいろな場に参加し、自分の存在価値を伝え、周囲からも認めてもらうように努力することが必要である。日常活動の中で自己研鑽を心がけ、多様な仲間を巻き込んで、存在感のある専門家集団を構築していきましょう。十人十色、個人の特徴を認め、その人の中にきらりと光るものを見つけ、集団全体でそれを大きく育てていく場の一つが学会である。個のみの生産から個プラス群の生産増幅の仕組みを持った環境にし、グローバルな国際社会で勝ち残っていける、1 + 1 が 2 以上になる、知識増幅のからくりを持った学会にしましょう。